碩心

社団法人　日本詩吟学院岳風会　認可
神奈川　碩心会　発行

58年12月号（137号）
発行者
根岸岳萃
編集
中村愛岳

58年12月現在会員数
逗子地区　147名
葉山地区　293名
大船地区　66名
（合計）　（506名）

吟ずる事

上原支部　大坪功泉

昨春二月、妻と二人で、全く何の心構えもなく、吟をはじめてみようかと、上原支部の伊藤教場に通うことになりました。以来、毎土曜日には先生の、驚く程の御熱心さと、温情ある御指導に感激しながら、夢中で勉強させていただいております。

吟には、先人が何時の頃からか培ってきた〝吟道〟と云う精神的世界がある様でございます。今この一年余りを振り返ってみますに、何と又大変な事を始めた事だろうと云う気持でいっぱいでございます。先に申しました様に、私共吟を始める動機は、それほど確たるものでなく、夫婦で共通の趣味でもと考え入会させていただいた様な訳ですが、この軽卒な気持が、後に退けない状況になった訳でございます。

幾度かの温習会、地区大会等に参加し、同好の方々の真剣、且つ熱気溢れるあの会場の雰囲気はまことに厳しく、趣味の発表会とは多分に次元、内容の異なる世界である様に感じました。まだまだ私には手も届きませんが、あの張りつめた会場の空気の何処かに〝道〟に通ずる何かがあるのではないでしょうか。この〝道〟の精神は、社会生活の営みの上に於て大切な共同意識と云う社会観に通ずるものではないかと、勝手に推察している訳でございます。

何時の日にか、この精神の片鱗でも覗い知る事ができればと、我が身の吟の未熟さを忘れて、沈思する昨今の頃です。然し前述遼遠の言葉通り、何時も一朝一夕には成る筈もありません。それは唯々諸先輩の後を追って、吟の研鑽に励む以外方法はない事でありましょう。

教場で、又折々の大会等で、先生方から〝心〟と云う言葉を耳にします。現在の社会には、余りにも道徳観を忘れた様な事柄、現象が多過ぎる感がいたします。人々が人間としての〝心〟を失いつつあるのではないでしょうか。〝心〟を失った人間は、何処へ行く事になりましょうか。恐ろしくもあります。

詩とは人間が考えた最も簡潔な〝心〟の表現方法だと思います。この数行の行間に潜む〝心〟の表情を、詩を詠ずることで理解出来るとすれば、それは吟の〝道〟に通ずる一里塚となりはしないでしょうか。吟を始めて間もない私は、こんな幼稚な事を考えながら、土曜日の教場通いを楽しみにしております。

教場の皆様、又多勢の吟友の皆様と、心のふれ合いを大切にしながら、一歩一歩確かなものを見定め、歩んで行きたいと念じております。どうぞよろしくお願い申しあげます。

五八・一一・二二

涼州詞

山の根支部　佐藤秀泉

山の根教場に於ては、三井雲岳先生より王之渙作の涼州詞を御教示賜りました。我が師の美声を以って朗々と吟じられる詩文を拝聴している中に、詩中に引き込まれ、黄河上流の断崖絶壁の両岸の間を滔々と流れる激流を、突出している巨巌を縫って遡流する船舶の光景が脳裏に浮び、詩文にある黄河の位置など知りたい衝動にかられ、非才を顧みず、再び参考書籍を繙いてみることにいたしました。

涼州詞　王之渙（盛唐698～755）

黄河遠く上る白雲の間
一片の孤城万仭の山
羌笛何ぞ須いん楊柳を怨むを
春光度らず玉門関
（涼州詞）

王翰作詩の涼州詞と同じく、涼州…即ち現在の甘粛省の武威地方を背景として作詩したものと推察されます。

（王之渙）

則天武后の頃出生、玄宗の頃死去、「尉」（軍事警察刑罰を司る）の官職にて唐王朝に仕え、詩人として生涯を終えられた方と思われます。

（黄河）

渤海に注ぐ大河川で、その流程は四八〇〇粁と記されてあり、古くは単に「河」と称し「黄」の字を付けたのは、河水が多量の黄土を含み、黄色を呈することから起ったものであると記されております。

（羌笛）

「羌」は現在の中国青海省を中心として北辺一帯に住んでいた西蔵系の遊牧民族であると記されております。

（楊柳を怨む）

「折楊柳」と称する楽曲で、長安の人々が旅人を見送る時「灞橋」（長安の東方にある橋）で柳の枝を折って別れを惜んだ故事であると記されてあります。

（玉門関）

漢王朝の頃、現在の甘粛省の西部に設置された関所で、石窟仏像で著名な「敦煌」の西方約百米の地点に遺跡があると記されております。（お詫び）掲載のおくれました事と紙面の関係上一部割愛、お許し下さい。

◇ 七・八段講習日変更の件

十一月号月報に58年12月18日と発表しましたが、左記の通り変更になりました。尚場所は平塚農業会館で変りありません。

とき・59年1月16日(月)9時～4時

◇「朗詠集」訂正箇所のお知らせと訂正についてのお願い

総本部・教本委員会

さきにお届け致しました「朗詠集」の中で誤り箇所がありましたので、左の通り訂正を致しました。ここにお知らせ致しますと同時に、ご訂正の上、御指導下さいますようお願い申し上げます（58年11月）

(訂正頁と行)	(誤)	(正)
(写真の下)	木村岳風	祖宗範 木村岳風
11頁3・111頁4 111頁9・140頁6 140頁11	宗範	祖宗範
34頁2	しづやしづ	しづやしづ
52頁5	山路は栗の	山路は栗の
98頁6	にしみがどには	にしみかどには
99頁2	さびしさに	さびしきに

不識庵機山を撃つの図に題す

世に戦国時代といわれる十六世紀半ばは、全国各地に群雄が割拠し、血なまぐさい戦闘を繰り広げていた。中でも信濃の国、川中島で行われた合戦は有名である。

永禄四年（一五六一）九月十日、ついに二人の英雄が、川中島に相まみえる時がきた。謙信三十三歳、信玄四十一歳。秋の夜寒がひとしお身にしむる頃であった。

「鞭声粛粛夜河を過る」

真夜半、謙信は、信玄の夜襲部隊が襲って来る途中、ひそかに妻女山を下り、雨の宮の渡しから千曲川を渡って川中島に出てしまったのである。妻女山の上には、旗印をなびかせ、篝火を焚いて、謙信がまだ山にあることを装った。対岸に渡った謙信は、川中島の真っただ中、八幡原に陣をしいた。両軍の間、わずか一キロ余り。その中に川中島の霧がますます濃く、深く立ちこめていた。

「暁に見る千兵の大牙を擁するを」

明けて九月十日午前六時、霧が晴れ始めた。ーと、その朝霧の向こうに、信玄は突如大地をゆるがす馬蹄の響きを聞いた。瞳をこらすと、信玄は、そこに予期せぬ物を見た。夢にも忘れぬ謙信の旗印…。白地に大きく「毘」と「龍」の文字を染め抜いた上杉の軍旗が、ようやく薄れ始めた朝霧の向こうに幻を見るかのように迫っていた。信玄は愕然とした。しかし、すかさず陣を立て直した信玄は、即座に決断を下した。

「遺恨なり十年一剣を磨き」

謙信と信玄は、この決戦まで、すでにこの川中島で三回にわたって対決していた。いずれも決定的な戦果を得られないまま、すでに八年にわたるお互いの遺恨が積み重なっていた。謙信はみずから単騎で戦場を迂回し、川のほとりで甲を脱ぎ白覆面となり、長刀を抜き肩に掛け、片手で手綱を操って信玄に切りつけた。

「流星光底長蛇を逸す」

謙信は三太刀切りつけたが、信玄は鉄の軍配団扇でこれを受け止めた。こうして午前十時を境に信玄は反撃し、優位に立った。午後四時頃戦いは終り、謙信はなお恨みを残しつつ越後に引き揚げ、信玄は深追いはせず、川中島にとどまった。

〃勝敗の行くえ〃

この戦いで双方の戦死六千と伝えられる。この戦いののち、謙信、信玄それぞれが各方面に書き送った手紙が残されている。それによると両方とも自分のほうが勝ったと宣伝している。激戦ではあったがあまりはっきりした結着がつかなかったという。戦いは終ったー。だが三年後八月、また川中島に対決したが、直接の衝突はなかったという。

〃悠久の時の流れ〃

天正元年（一五七三）信玄は上京の途中信州伊那の駒場で五十三歳で死に、謙信もまた、その五年後四十九歳で死んだ。共に天下を望みながら、互いに牽制し合い、川中島に疲れ果て、結局両方とも果さなかった。

そして二人の英雄が相まみえた川中島は、今は犀川や千曲川もその流れを変えてしまい、悠久の時の流れの中に、ただ静かであるー。

岳風会レコード完成記念

吟詠発表会（58・11・20）

村田　瀞風

神宮の森は秋の色も深く、南参道を通り明治神宮会館に入ると、もう会場は満席、吟詠教本漢詩篇が51年末発行されて以来、その参考用レコード・カセットテープを53年の第一集に始まり、教本の頁を追って、全吟題が今年春第九集まで録音され、その完成を記念し、担当された吟者に依る発表会が行われました。吟者は全国各地より選抜された中より選ばれ、吟歴20年・25年という方も多く、さすがと頭が下ります。神奈川県からは覚張岳瑛先生、湘南吟詠会の鈴木香岳先生、桜風会三森湖風先生が出吟され、すばらしい吟を聞かせていただきました。どなたの吟も声、節、品ともにそなえ、すっかり魅了させられました。

発表会々長松井岳洋理事長の挨拶は、この完成に貢献された関係役員、又担当された吟者への御苦労を心から感謝すると共に、晴れて天下に自己の吟を認められ、賞揚された方々が将来さらに謙虚に、慢心することなく研鑽を重ねる様、又あまりのどに恵まれない者でも、不断の研鑽と人徳によって、人の心を動かす味合いが出て来るものであると結ばれ、新田大作先生の祝辞があり、又吟に移る。

食事時間以外は殆んど席を立つ人もない程、皆が耳をかたむけ感動し、余韻がいつまでも心の奥に広がって行きます。

人の心を打つような吟が何時になったら出来るのかと、少々情ない想いがいたします。82番が終り大合吟朗詠が終るまで、時間のたつのを忘れ、会場を出た時はもう日も落ちて、肩をすぼめて駅へ向いました。碩心会よりの出席者は九名でした。

編集後記

寄稿のお願い

一年又過ぐ…去年の暮にも同じような事を書きましたが、あれからもう一年…と振りかえり、年々才々一年の経つ事の早さを泌々感じる今日この頃です。

四月からこの月報が「碩心」という名称に変りました。最近入られた方にと思い、先月号で〝碩心会・会名の由来〟を再掲載、「碩心」なる立派な会名の意味もお分りいただけたと思いますが、この様な素晴らしい「碩心」の名に恥じない広報紙にしたいものと私なりに思うのです。しかし不勉強で仲々思う様にはゆきません。

この「碩心」が新しいスタイルになる時「文字を大きくしたら読みやすいし、字数も少くてすむのでは……」とのありがたい助言もチラとありましたが、なんとなくこんなスタイルになりました。これから先々大変だなあなんて思いながら、ドタン場にきてなんとか…。全くの行きあたりバッタリ。でも出来上った時の嬉しさは又格別、ツイテル!!なんてひとりで喜んでいます。そして又来月が来る…その場になったら何とかなるさ…そんな気持ちのくり返しで毎月編集している私です。

そこで皆様にお願い…今年も皆様の御協力でなんとか編集を終る事ができましたが、これからはもっともっと原稿をお寄せ下さいますことを心からお願い致します。

木枯らしに木々の葉もすっかり舞い散って、梢の間にぬけるような蒼い空が目に入ります。今年は柿の実などが豊かに実ってこの様な年は冬の寒さが厳しいとか……。どうぞ風邪などひかぬ様、よいお年をお迎え下さいますよう。

退会

399　小峰更枝子（逗子A）

400　佐原　正夫（逗子A）